

## 第14回花の国づくり共励会（平成16年度）花き技術・経営コンクール審査講評

平成17年3月18日

審査委員長 今西 英雄

第14回花の国づくり共励会花き技術・経営コンクールには、花の国づくり都道府県協議会より11件の推薦がありました。審査は、6名の審査委員により、提出された書類に基づく第1次審査と現地での第2次審査を通して厳正に行われ、別表の通り受賞者名簿が作成されました。

本共励会の最高賞である農林水産大臣賞には、次の2点が選ばれました。

東京都八丈町の八丈島農業振興青年研究会鉢物部会は、久しぶりの集団による受賞である。島の特産であるフェニックス・ロベレニーの切り葉や鉢物を主体として生産する4経営体・5名からなる集団である。集団全体の栽培面積は、露地7.4ha、施設1.7ha弱であり、フェニックス・ロベレニーの切り葉を露地で、施設では鉢物を主として生産している。部会の活動として特筆されるのがフェニックス・ロベレニーの鉢物輸出への取り組みであり、輸出用の鉢物生産を担う組織として平成5年に発足している。冷蔵40フィートコンテナを用いて船舶輸送を行えるように荷造技術を開発し、輸出に耐えうる品質を確保するための技術確立に努め、平成10年には出荷量5000鉢、出荷金額3000万円を超えるまでになり、台風により生産の大幅減を被った平成15年を除けば、2000～3000万円の水準を維持している。島しょ部という不利な条件にもかかわらず、欧州への輸出という画期的な販路開拓に成功し、地域農業と農業経営の発展に寄与するだけでなく、産地対応の一つの方向性を示すものとしても高く評価でき、農林水産大臣賞に値すると判定された。

岐阜県加茂郡川辺町の西垣正俊氏は、昭和62年に約10aの面積で宿根草の鉢物栽培から営農を開始し、その後規模拡大を続けて、平成10年には施設面積95aとなり、鉢物生産から苗物生産に重点を移し、平成13年に有限会社西垣園芸を設立した。現在の経営は、栄養繁殖性のオステオスペルマム、友禅菊などの宿根草、ランタナなどの花木を組み合わせた30種類を超す多品目生産を1.5ha強の施設と0.1haの露地で行い、年間出荷量約200万ポット、売上高は2億9千万円を超す大規模経営体である。2年間の研修を経て就農後18年、5人の正社員、40人のパートを雇用する39才の若い経営者である。生産面では、パートのグループ化による作業の特化と栽培技術のマニュアル化により、生産から出荷までの一元的な管理を可能にしたこと、簡易プールベンチ方式による底面給水によるかん水の省力化とコスト低減、鉢をケースにつめたままのロット式管理による作業の効率化と計画生産、さらに付加価値を付けた商品の開発と積極的な営業活動によるホームセンターや量販店との予約相対取引の増加という販売面における努力、それらの結果としての極

めて高い収益性が高く評価され、農林水産大臣賞に値すると判定された。

生産局長賞に選ばれた4経営体は、以下に述べる点で高く評価されますが、農林水産大臣賞に選ばれた2経営体に規模や収益性の上で及ばないと判断されました。

宮城県遠田郡南郷町の有限会社ハニーローズなんごうは、2haの大規模温室でバラの専作経営に取り組み、多品種の導入による生産の安定化、施設内環境の改善による日持ちの良いバラ生産とバケット流通による鮮度の維持に努めるとともに、県外への市場開拓と消費者交流に取り組んでいる点が評価される。

愛知県春日井市の有限会社 H&L プランテーションの鶴飼敏之・浩氏は、花壇苗を暖地と高冷地のリレー栽培で生産し、幅広い出荷期間と500品目150万鉢出荷を可能にし、契約栽培・契約販売による安定した経営を確立し、家族経営協定による役割分担の明確化を図っている点が評価される。

福岡県福岡市の高橋三千年・節子氏は、バラの養液栽培に取り組み、温度管理や栽培管理の自動化、シュートの仕立て方法の改善、バケット流通に取り組むなど、夫婦で協力して収量、収益ともに高い経営を行っている点が評価される。

鹿児島県指宿市の小村幸一氏は、台風の影響を克服して、観葉植物の需要減少と単価低落が進み経営難に陥る栽培農家が多い中で、パソコンによる経営分析法を導入して生産性、品質の向上を図り、安定した経営基盤を確立している点が評価される。

以上のほか、(財)日本花普及センター会長賞の5経営体の方々も、いずれも高い技術に基づいた経営者能力を発揮して安定した経営を行っており、高く評価されました。

また、今回の審査で特に印象に残ったのは、いずれの経営体にあっても、単に生産するだけでなく販売面にも力を注ぎ、消費者ニーズに合う品目の生産や商品の開発に努めておられる点であり、「花が売れない」といわれる中で、心強く感じました。

受賞者の皆様には、心からお祝いを申し上げますとともに、今後ともわが国の花き産業の発展のためご尽力下さるようお願いし、審査講評といたします。



農林水産大臣賞受賞 集団の部： 八丈島農業振興青年研究会 鉢物部会



輸出用フェニックス・ロベレニーの鉢物(植物検疫受検のための荷姿)



フェニックス・ロベレニーの共選場  
(集出荷施設における検査風景)



フェニックス・ロベレニーの切葉  
(国内市場向け出荷用)



農林水産大臣賞受賞 個人の部: 有限会社西垣園芸 西垣正俊



プールベンチ栽培の花苗生産状況



簡易プールベンチによる花苗生産状況



花苗の移動搬出用台車  
(ベンチの両サイドのレール上を手動で移動)

第14回花の国づくり共励会  
花き技術・経営コンクール受賞者一覧表

【農林水産大臣賞】

- ◎ 八丈島農業振興青年研究会鉢物部会  
代表者 大沢 猛邦 47歳 (フェニックス・ロゼ、ペラントナリ、シエラ、ケンチャシ、オーガスタ、高性チエマ  
トリア、サンゴソニア)  
〒100-1401 東京都八丈島八丈町大賀郷 1,536
- ◎ 有限会社 西垣園芸  
西垣 正俊 39歳 (アムジストセージ、ピデンス、フェリシア、友禅菊、オステオスペルマム、マーガレット、ランタ、ラベン  
タ一等)  
〒509-0304 岐阜県加茂郡川辺町中川辺 38-1

【農林水産省生産局長賞】

- ◎ 有限会社 ハニーローズなんごう  
代表取締役 榎山 恒雄 53歳 (バラ)  
〒989-4203 宮城県遠田郡
- ◎ 有限会社 H&Lプランテーション  
鵜飼 敏之 31歳 鵜飼 浩 59歳 (花壇苗：パングー、ピオラ、アリッサム、プリムラ、ベゴニア等)  
〒480-0303 愛知県春日井市
- ◎ 高橋 三千年 53歳 高橋 節子 48歳 (バラ)  
〒819-0203 福岡県福岡市
- ◎ 小村 幸一 50歳 (パキラ、トウチキ・マッサカ一等)  
〒891-0311 鹿児島県指宿市

【(財)日本花普及センター会長賞】

- ◎ 神藤 正和 62歳 (葉ぼたん、苗物：ピオラ等、シロフカ)  
〒598-0021 大阪府泉佐野市
- ◎ 谷寄 隆雄 50歳 (ハナモ、サンシュユ、サウ、マツ)  
〒560-0052 大阪府豊中市
- ◎ 尾崎 進一郎 67歳 (シビジウム、ピデントラム)  
〒775-0601 徳島県海部郡
- ◎ 松永 宏隆 38歳 (ゆり)  
〒849-0906 佐賀県佐賀市
- ◎ JA東長崎菊部会  
代表者 松尾 修一 40歳 (きく)  
〒851-0133 長崎県長崎市

## 【農林水産大臣賞受賞理由】

八丈島農業振興青年研究会鉢物部会

代表者 大沢 猛邦 東京都八丈島

東京都八丈町の八丈島農業振興青年研究会鉢物部会は、島の特産であるフェニックス・ロベレニーの切り葉や鉢物を主体として生産する4経営体・5名からなる集団である。集団全体の栽培面積は、露地 7.4ha、施設 1.7ha 弱であり、フェニックス・ロベレニーの切り葉を露地で、施設では鉢物を主として生産している。部会の活動として特筆されるのがフェニックス・ロベレニーの鉢物輸出への取り組みであり、輸出用の鉢物生産を担う組織として平成5年に発足している。冷蔵 40 フィートコンテナを用いて船舶輸送を行えるように荷造技術を開発し、輸出に耐えうる品質を確保するための技術確立に努め、平成10年には出荷量 5000 鉢、出荷金額 3000 万円を超えるまでになり、台風により生産の大幅減を被った平成15年を除けば、2000～3000 万円の水準を維持している。島しょ部という不利な条件にもかかわらず、欧州への輸出という画期的な販路開拓に成功し、地域農業と農業経営の発展に寄与するだけでなく、産地対応の一つの方向性を示すものとして高く評価される。

(有)西垣園芸 西垣 正俊 岐阜県加茂郡

岐阜県加茂郡川辺町の西垣正俊氏は、昭和62年に約10aの面積で宿根草の鉢物栽培から営農を開始し、その後規模拡大を続けて、平成10年には施設面積95aとなり、鉢物生産から苗物生産に重点を移し、平成13年に有限会社西垣園芸を設立した。現在の経営は、栄養繁殖性のオステオスペルマム、友禅菊などの宿根草、ランタナなどの花木を組み合わせた30種類を超す多品目生産を1.5ha強の施設と0.1haの露地で行い、年間出荷量約200万ポット、売上高は2億9千万円を超す大規模経営体である。2年間の研修を経て就農後18年、5人の正社員、40人のパートを雇用する39才の若い経営者である。生産面では、パートのグループ化による作業の特化と栽培技術のマニュアル化により、生産から出荷までの一元的な管理を可能にしたこと、簡易プールベンチ方式による底面吸水によるかん水の省力化とコスト低減、鉢をケースにつめたままのロット式管理による作業の効率化と計画生産、さらに付加価値を付けた商品の開発と積極的な営業活動によるホームセンターや量販店との予約相対取引の増加という販売面における努力、それらの結果としての極めて高い収益性が高く評価された。



## 【農林水産省生産局長賞受賞理由】

(有)ハニーローズなんごう

代表取締役 榎山 恒雄 宮城県遠田郡

有限会社ハニーローズなんごうは、従来の水稲の複合部門としての花き導入とは異なる形で花きの専作経営を実現し、地域の水田農業に大きな影響を与えている。

また、個別農家が共同出資で会社を立ち上げ、規模拡大を実現し、一戸当たりの所得の確保を目指すと同時に、従来の家族経営から雇用の企業経営への転換を果たしている。また、園芸団地のモデルとして大きな成果を上げ、地域への波及効果も高い。

市場出荷中心の販売から多様な販売方法を検討し、直売向けにラッピング花束やフラワーアレンジメントなどの商品化、技術の習得にも力を入れている。

「ばらを通じて、幸福と豊かさを」を信条に、町内の幼稚園・小学校へのばらのプレゼントや研修生受入による地域農業担い手の育成、また、地域雇用の創出など、地域に根ざした活動での社会貢献が認められるなどの点で評価される。

(有)H&Lプランテーション

鶴飼 敏之・鶴飼 浩 愛知県春日井市

有限会社H&Lプランテーション(以下、H&Lという。)の始まりは、現在の鶴飼 浩会長が昭和 60 年に開始した花苗の生産から始まり、平成 5 年からはハーブ苗生産を始め、ガーデニングブームもあり、「花苗・ハーブ苗＝鶴飼園芸」とまで云われるようになり、H&Lの全身である「鶴飼園芸」の名前は全国に広まった。

H&Lの生産農場は、春日井(愛知県)農場と八ヶ岳(長野県)農場の2か所にある。平成 12 年、暖地と高冷地の組み合わせによって 500アイテム 150万鉢の花苗を年間通じて安定的に供給することを実践している。

H&Lの出荷は、花き市場を通さず、すべて契約によって取引され、取引相手とは栽培開始前に出荷数量・単価を契約しておく。これにより計画栽培、計画出荷の組立を可能にしている。

H&Lは、「最終消費者の手に渡るまでが商売」というのが経営姿勢であり、消費者からの意見やクレーム等が直接返ってくる。そのケアも含め直接取引は、消費者ニーズを的確につかむことによって、常に消費者の視点に立った経営展開に役立っている。その他、品目・バーコード貼付済み鉢の導入による POS 管理、家族経営協定による役割分担の明確化と円滑な世代交代が行われ、益々経営を伸ばしている。

省力化への工夫では平成 12 年より、自動播種機、ポッティングマシンを導入したことで、播種・育苗、定植準備の 10a 当たりの労働時間は、従来よりも 400 時間以上短縮されている。

また、福祉等にも目を向け、積極的に雇用の機会を与えるなど、地域社会に貢献していることなどの点が評価される。

### 高橋 三千年・高橋 節子 福岡県福岡市

高橋夫妻は、地域でいち早く養液栽培(ロックウール)に取り組み、温度管理や栽培管理の自動化、アーチング栽培の改善、パケット流通に取り組むなど、新技術を積極的に導入し、栽培技術の確立及び生産性の向上を図っている。この努力により、バラ栽培においては、地域でも収量、収益ともにトップレベルを維持している。また、地域のリーダーとして自身が確立した栽培技術の指導を行うなど花き振興に果たした役割は大きい。

経営面においては、家族経営協定を締結するなど、夫婦での役割分担を明確にしている。特にバラ栽培において重要な品種の選定においては、妻の節子氏が大きな役割を果たしている。また、女性部組織のリーダーとして、各農家の経営改善や女性の経営参画を図るための活動を行うなど夫婦ともに地域への貢献度が評価される。

### 小 村 幸 一 鹿児島県指宿市

小村氏在住の指宿市は、台風の常襲地域であり、生産量・品質ともに不安定であったが、耐候性ハウスを導入し、周年生産を可能にして、今まで以上の計画出荷と多種多様な品目が栽培可能になり、市場の信頼性を高めている。

また、南西諸島・外国からの原木の移・輸入により、在圃期間を短縮し、ハウスの回転率を高め生産量の増大を図っている。特に南西諸島では、現地農家に原木栽培を委託し、オリジナル商品の開発に心がけている。

品目によっては、消費者が商品購入後伸びすぎる品目があり、改善を求められていたが、わい化剤を利用して解決している。特に、パキラは、品質が向上し、市場の評価を高め価格を安定させている。

経営面では、パソコンによる経営分析法を導入して、生産性、品質の向上を図るなど経営基盤を確立している。また、技術面においても、後進の指導を行うとともに公共施設に観葉植物を提供してイメージアップに積極的に取り組むなど地域に貢献していることが評価される。



## 【(財) 日本花普及センター会長賞受賞理由】

神 藤 正 和            大阪府泉佐野市

神藤氏は、土地利用型農業の「水稻＋タマネギ」や露地野菜主体の産地にありながら、常に企業的な感覚を持ち、視野を広げて時代に合わせた経営を考え実践している。

急速に店舗展開をしてきたホームセンターの園芸部門で花壇苗や野菜苗は、販売の目玉でもあり、集客と他の関連資材の販売にも大きくつながる商品である。氏の経営は、ホームセンターにとって一定価格で安定した苗物供給を受けたいという要求に巧く合わせたものである。この要求に合わせるためには、生産価格を低く抑え、均品質のものを一時期に大量に出荷できる体制づくりが必要である。そのため、毎年、生産設備に投資して省力化を図りながら生産量を拡大したり、花き市場を間に挟むことにより、手数料はかかるものの輸送や決済のリスクをなくすようにしている。また、消費者ニーズを的確につかむための市場調査や需要予想等、販売戦略も従来の農業感覚からは抜きん出たものがうかがえる。春秋の野菜苗生産を主体においたことで、播種から出荷までの栽培期間が花苗より短く、品種、品目の組み合わせによって、単位面積当たりの生産数を増加させることにもつながっている。

このようにして、生産拡大をしながらも機械化と雇用により、家族労働にゆとりのある経営を目指している。後継者である秀和氏も就農と同時に氏の技術や経営を学び、寄せ植え用の新花材やハーブ類を手がける等若い感覚を入れようと努力している。市場では花壇苗として取り扱われている野菜苗の生産を、花苗の生産技術と流通システムに巧く乗せ、安定した価格形成と新たな商品提案を行ってきたところが評価される。

谷 寄 隆 雄            大阪府豊中市

谷寄氏の農業経営は、切り枝花木の専作経営であり、大都市近郊で経営を維持するのは大変な分野である。特に、ここ数年は、切り枝類の価格が低く推移し、樹園地の管理費も出ない産地もあり、また、消費形態の変化により出荷規格の短少化を試行する産地も多い。そのような中で、以前より都市化に合わせて出作による面積拡大をし、その条件を巧く生かすための作目選定、省力化、技術の研鑽に励んでいる。

作目の選定では、採花までの年数や採花の間隔が長いサンシュユに目を着け、適地を探し土壌改良等管理面の努力で定着させたことが生きている。長い視点での計画性がないと導入しにくい品目を入れたところに氏の先見性がある。また、モモは

毎年採花ができ、サンシュユとの組合せ品目としては適している。

促成技術や栽培管理技術も、今では普及している環状剥皮やふかし技術を当時は視察や研究によって一つ一つ自分のものにしてきた努力が見られる。

家が市場に近いという地の利と合わせ、仕事花に使えるようにあえて長い規格の束に変えることにより、品質の高い花を、無駄な残渣を出さずに、時間をかけずに出荷しているなど、氏の切り枝品質の高さが評価される。

## 尾崎 進一郎 徳島県海部郡

尾崎氏は、当初、水稻、野菜類の栽培を行っていたが、昭和 60 年からシンビジウム鉢物の経営を開始した。現在では、全国有数の生産量を誇る徳島県のシンビジウム鉢物生産の中であって、代表的な経営者となっている。

シンビジウムの主要産地は、県東部から吉野川北岸地域に点在しているが、尾崎氏が経営基盤としている県南地域は、高温多雨の気象条件下にあり、病害対策などが課題となっている。そのような中、氏は気象条件に合うオリジナル品種の開発及びその品種登録を進めることで、安定生産と有利販売に取り組んでいる。

さらに、ロング肥料や多年張フィルムを導入による労働時間の削減、エピデンドラム鉢物栽培との組み合わせによる出荷作業の分散を図る等、経営面においても合理化に努めている。

販売面においても、直売による消費者ニーズの把握に努め、今後の有利販売に繋げている。

後継者である長男と共同経営体制を取りつつ、さらに周年出荷に向けた新品种や有望品種の導入に取り組む等、将来を見越した経営拡大にも積極的である。

また、地域の生産者との連携や生産性の向上に精力的に取り組み、洋ラン鉢物生産の振興に貢献していることなどの点が評価される。

## 松 永 宏 隆 佐賀県佐賀市

松永氏は、就農当時は主に一般草花栽培を経営の柱にしていたが、消費者ニーズの変遷を受け、チューリップへと切替え、平成 10 年頃までは、チューリップの促成栽培を主にした経営であった。

以後、雇用人員の確保や人件費の問題から、平成 11 年からは、主要品目を「ゆり」に絞って経営を行っている。

氏は、経営面では、徹底したコスト管理と雇用の活用による経営を確立しているほか、栽培面では、手作業で丁寧な選別・調整を行うことで高品質な商品づくりに

努め、大小 50 棟のハウスを活用して、作型分散による周年栽培・継続出荷を実現し、東京など大都市の市場から高い評価を得ている。

また、いち早く蒸気土壌消毒機を導入し、農薬散布回数の削減など環境に配慮した生産にも努めている。

さらに、市場や業者・インターネットなどを通じて、消費者ニーズや販売情報・品種情報等を入手し、自らの経営に生かしており、常にトップクラスの経営を行っている点で評価される。

#### **J A 東長崎菊部会**

**代表者 松尾 修一 長崎県長崎市**

J A 東長崎部会は、長崎市の春日、日見、西山地区を生産拠点としており、30 歳台 2 名、40 歳台 3 名、50 歳台 1 名、60 歳台 1 名、70 歳台 1 名、計 8 名で構成し、共選により出荷を行っている。

部会員のほ場は、急傾斜地の条件不利地であるが、各地のきく部会との交流も積極的に行い、生産技術の高位平準化に努め、高品質きく生産を行っており、部会の販売金額は、8 名で 1 億円を超えている。

特に、全国に先駆けて夏菊品種「岩の白扇」の導入、以後、秋菊品種「神馬」を県下でいち早く導入するなど、新品種導入に積極的に取り組んでいる。

また、直挿し栽培法、無摘心栽培法、不耕起栽培法の新技術を導入し、省力化栽培に努めている。

なお、当部会の平均的な栽培面積は、地形的な制約から決して広くなく、平均 31.4a となっている。そのため、自家労力が経営の主力となっており、女性を重要な経営のパートナーと位置付けている。

このようなことから、平成 9 年には、女性部を設置し、女性部研修会や各種研修会に女性が参加するなど女性パワーを積極的に活用しているほか、各種研修生を積極的に受入れるなどの点で評価される。